

Title	ガンに倒れた人々
Author(s)	高橋, ミツ子; 小池, 晶子; 佐藤, 千枝子
Citation	大阪公衆衛生. 1960, 7, p. 22-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84698
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

= ガンに倒れた人々=

府立成人病センター 高 橋 ミツ子

小 池 晶 子

佐 藤 干枝子

昨年の秋、阪大公衆衛生学教室との協力で私達成人病センターの保健婦は、子宮ガンで亡くなった方方の家族訪問調査を行ないましたが、その当時の記録をここにひき出してみました。訪問に出掛ける前は、家族の方達が、亡くなった方の事を快く話して下さるかどうか心配でしたし、また何かとぶしつけなこともおたずねしなくてはなりませんので、それがお気の毒で気乗りがしなかったというのが、どうも私達のほんとうの気持だったようです。

御主人のはなし

最初に57才の御主人と小学6年の女の子とが話してくれたことを書いてみます。

≪駅の近くで遊んでいた小学校の男の子達が道案内 をしてくれた。

もと中学校だった建物が改造されて、今は建築会社 の仕事場となっている。○○さんはその仕事場の中に 居を構えている大工さんである。

あらかじめ出しておいたアンケートの葉書を取り出して、訪問の目的を告げると○○さんは「わざわざすみませんだなア」といいながら頭の鉢巻をはずして立ち上り、私を家の方へ招じ入れてくれた。

「手術もしたし、放射線もかけたし、尽くせる限りの手は尽くしましたがダメでした。あげくの果ては大借金ということになってしもうて……」

部屋の中はガランとしている。

「初めの症状だっか?

そうだンな。なんでも初めは血がおりましてな。

わしら、年ですから、それは1月に1回くらいでっしゃろ、その時に血がおりましてな。

初めの頃は少のうおました。それに他にはどこも悪いことはおまへんし別に気にもせんときましたが…。

半年たっても、その都度、血がおりまんので、こり ゃ、病気かも知れんと思うようになりました。」

しかし奥さんは和战の内職が忙がしくて,医者に行 こうと思い立った頃は暮のせわしない盛りで,徹夜す ることが幾晩もあり,とても"医者に行く余裕"がな かったのだという。

医者には "余裕" がなければ行かないものなのだろうか。○○さんはその "余裕" の条件についてこう話していた。

内職も断わりたくない

「まあ、わたしが職人でっしゃろ、わたしの取り高 だけでは、とても生活が追いつきませなんだ。

家内の針仕事かて、そりゃあんた、やればやったでなんばかになりまっしゃろ。いいや、それどころか、まあ、バカにはできんもんでっせ。

長男が22才,わたしと一緒の会社で,ブルドーザーの運転手をしとります。次男が18。今,イワシ舟に乗っとりますがそれも,そろそろ漁が終りですから,そうしたら近所の工場に働きに出たいというとります。

末っ子が小学六年。先妻の子供が女二人。それはもう. 片附いてますがなんということはない, ただただ一生懸命に働かなくては, 食べて行かれん状態です。 そんなわけで, 家内も, 先生のところへ行くに行かれなかったんでっしゃろ…。 仕立て物も頼まれれば, あっさり断わりもできしまへんやろ…。 |

奥さんの様子についても、まさかガンだとは思いも つかなかったのだという。

「家内の父親が門ガンで亡くなったんです。わたしの母親が、それこそ子宮ガンで亡くなったのですが、わたしが〝ややこ〟だった時分なので、どんな具合だったのか、全然知れしまへんねン。

家内のも,初めは,血がおりるのを,月のものかな アとも思うたりしてました。」

ようやくA病院に行った時、間違いなく子宮ガンだと診断されたそうだ。しかし、ほんとうに自分がガンだとは信じられず、続いてB病院へ。

そこでも診断は同様だった。

入院して徹底的に治療してもらおうと思ったが、部屋があいていないからというので、B病院には入院できず、C病院に入院したのだそうだ。

長い道程

それまでお勝手でコトコトやっていた女の子が、 まな板と野菜物をもちこんで、私達の話に加わった。

「今夜は,カレー・ライス,作るねん」

女の子の声は明るい。

――もうそんな時刻なのかナ? インタビューを早いところ切り上げなくてはいけない、と思いながらもピッチは容易に上らない。

「手術はいつごろでした?」

「そうだんなア…」

「うちが夏休みになってからやんか。」

「そやそや、そうやったな。

開いてみたら、もう骨盤にまで、ガンがトビヒして いたというのです。

その後, 注射をしました。

半年で退院したのですが、そのあと見合いの良かったのはわずか1カ月で、12月なかば頃には腸が通らなくなってしまい、胃腸専門のD病院に行きました。

そやけどなア、Dでは、もう手に負えんといわれて 医病院に入院したんです。

手術は、もうできんというととで、ラジウムとコバルトをかけました。」

「ほんまに、えらかったでしょうね」

「ほんまに…」とつぶやきながら御主人は病院の領収書とソロバンを持ち出して来て、ひとつ入れてみておくんなばるかという。

手術代や放射線の費用,手術のあとたのんだ派出看 護婦への支払い,病人のための特別の食費,家族が見 舞いに行くために買った電車の定期代,また,ある病 院では殺具持参だったのでその運搬費とか,その他, 傾収書のない出費と合計すると,結局70~80万円はか かったという。

「そういうお金は全部, 社長さんが立て替えてくれました。とにかくやるだけのことはやってあげるようにということで……。

国保を使いましたが、一時的にはどうしてもそれだけの払いとみをすることになりますな……。

その国保の手続きも,なんやかやいうて,今だにカタがついておまへんねん。

それに国保は使えんという支払いが多くて、結局は おおかた保険のないようなもんですな。

そやから, ガンなどという病気になったら, あるったけのお金は全部はがされてしまいますな。」

社長さんの立て替えてくれたというお金は, 今, 御

主人と長男と二人の給料から 毎月 5,000円づつ返しているとのこと,「10年計画ですねん」といっていた。

お母ちゃん 死んでよかった

奥さんが最後にE病院を退院してから亡くなるまでの1ヵ月間というものは、御主人と、12才になる末娘とが、全部、面倒をみたのだという。

「うちかて,よう働いたなア。

毎日、1日に3回か4回か、腰湯つかわせて……」 「おりものの世話がえろうて、布きれを近所の人達 からもらい集めて来てました」

「血がギョーサンおりて, 便器一杯づつも出よった よ。

そやけど,ようやく死んじゃった。

お母ちゃん死んで良かったと思った。痛い痛いいう て、かわいそうやったもン……。

家の中かて、くそうて……。

うちな、お母ちゃん、病気になってから、ずうっと 御飯たいたよ、毎日。

ウン,学校行ったかて,お母ちゃんのことばっかり 考えてて面白ろうないさかい,たくさん学校休んだ。 なア,お父ちゃん。

お母ちゃん,死んじゃってからも、朝,はように起きて御飯つくらんならんさかい,遅うなったら,学校行くの,いやになんねん。学校,休んでしまうねん」

この4人の家族は母親の亡き後、家事一切をこの12 才の末娘に依存している。だがしかし、彼女には荷が 重すぎる。

殊に、彼女は裁縫を習い始めて、まだ間がないので つくろい物が一番困るという。

この間も4人分の下着類のつくろいを近所のおばさんに頼んだら、かれこれ2,000円はかかったという。休まずに行けば行くほど、面白うなる所とちがう?わたし、小学校の頃、いつもそう思うていたわ」といったら、彼女は「そうかなア。ほんまにそうやろか」といっていた。

治療費のつらい工面

病人はただ亡くなったのではないのでした。後の家族の人々に、10年にもわたる負債―そればかりではないのですが一を残していったのです。

また、相当に財産のあった人でも、とうとう、生保 にかかるようになったという場合もあります。

田地も山林もあり、大きな家邸を構えた、謂わば村 の"古い家柄"であった方なのですが、保険がなかっ たので全額、私費で、最初の入院で40万円程使い、家 を抵当にして組合から借金したのでした。

手術をうけ、ラジウム照射もうけ、退院後の経過も 良かったのですが、そのうちに太股のつけ根が痛み出 し、病院に行ったところが"再発"といわれたという のです。

再入院。

しかし病院では入院を快く承諾してはくれず、押し 問答の末、無理矢理に入院しました。

家には、工員として働いている17才の次男と小学生の三女と御主人とだけで、22才と20才になる長女と次女とが住みこみで働いていますから、家で療養するにはやはり充分に手当てができない。ですからどうしても入院を望んだわけだったのです。

もう手術はできないし、体も弱っているから放射線 はかけられないといい渡されて入院したのです。

その頃、御主人は病院に毎日詰めていました。そして、一日おきに"岸の神さま"といわれている○○寺にお詣りし、"アロエ"がうずきに効くというので、信仰している"岸の神さま"からそれを買って来て使っておられました。

しかし、しまいには新しいアロエが手に入らなくなってしまい、焼酎づけの古いのを使ったそうです。それから、ハコベの背沿もしぼって飲ませたそうです。

そんなわけで出費がバカにできない。病院への支払いもしなくてはいけない。しかし家や山は全部,借金のカタにしてしまったので,これ以上クメンの仕様がなくなってしまい,御主人は村の知り合いの人に相談にのってもらい,生保を頼んだのだそうです。

それでホッとひと息ついたものの、奥さんの病気は 日増しにつのる一方で、それから1カ月後に奥さんは 病院で他界されたのでした。

手術も受けられずに

この方達は手術もしたし、放射線の照射も受けたのですが、中には治療費の工面がつかないために、手術をしなかった人もいるのです。

そういう人の例として51才で亡くなった○野さんの 記録の中から一部をとり出してみましよう。

≪うすい褐色のおりものがあるというので、家族の人が再三、医者に行くようにすすめたが、どうしても行こうとしなかった。恥かしいから厭だといっていたが、それより、家庭の経済状態を一番気にしていたようだと御主人が話してくれた。

医者に行ったのは血性帯下に気がついてから7ヵ月 後だった。

それでも、病院からは、手術ができるからといって 手術をすすめられたが、保険がなかったから、費用は 総額30万円はかかるだろうと聞かされて、手術はあき らめてしまった。

世帯主である御主人が農業。24才の次男が御主人を 手伝っている。29才の長男が土木業,そしてその奥さ ん。孫が2人更に末っ子の四男がまだ中学2年。

そんな大家族をかかえて、わずかばかりの現金収入 である。保険もなし、医者から何気なくいわれた"30 万円"は全くショッキングだったに違いない。

それまでは"医者に行くように"と励めて来た家族の人々も、もう"医者"とはいわなくなったそうだ。 そして亡くなるまで、とうとう医者にはかからなかったという≫

ガンと診断されても,経済的に困難なために治療しな かったという人が少なくありませんでした。

怒り――あきらめ

一回の訪問でインタビューの時間は平均1時間。府 下全域にわたるので、住所の近い人々は同じ日に訪問 しました。それでも週に5,6件。

それがみんな、つらく悲しかつた思い出話であり、 "お金を使えば使う程、早く死んでしまうのではないか"とか "保険を嫌う病院に行くのはつらかった。嫌 うのに何故保険医という看板をかけているのだろう" というような言葉でも端的に表現されているのですが 無形のものに対する怒りや惜しみさえもがとめられい るように思うのです。

中には、こちらがたずねるのも気の毒な位に、あき らめ切っていた方もいました。

初めて医者に行った時すでに望みなしといわれ、いずれ助からないものを、痛い思いをさせたり、お金を使ったりするよりはと思って、お大師さまにおこもりをして気持の上で落ち着かせる方が本人のためにもよかろうというので、2カ月半程"カムロ"におこもりをしたというのです。

それでも治療を完全に諦めてしまったというわけでは勿論ないのです。知り合いの人でやはり同じ子宮ガンで○○県からとりよせた何とかいう坐薬を使って助かったという話をきき、早速それをとりよせて使ったというのです。

末期にとくに痛んで困ったということがなかったのは、「お大師におすがりしていたからだんな」とはい

っていたのですが、それでも、「お金を使うばかりが "のう"でもないし」と繰り返しておられました。

みじめなゴール

病気の末期というものは、病人自身は勿論、家族の 人々も、大変な苦労のようでした。

次の記録は、36才の若さで、小学四年と二年生の二 人の子供を残して亡くなった方の御主人の話です。

「一回目に入院した時, 手術をしました。二回目に 入院したのは, もうどうにも手がつけられなくなった からですが, 結局は本人の希望で退院しました。

世話は全部、おばあちゃんがしてくれはりましたが 退院してから亡くなるまでの1ヵ月間、両脚や背中、 とにかく体中、えろう痛がりまして、開業の先生から 痛め止めの注射を専門にやってもろうてました。

寝具や下着類もできるだけやわらかい布地のものを 特に選んで使うてました。

太股のリンパ腺にガンがトビヒしたとかで、そこが 外に破れて、大きな花キャベツのようになってしまい ました。

それを始末するのにオキシフルピやンセット,ガーゼなど一式用意しておきまして,1日に何回も手当てしました|

小学生が休学して

この方は、おばあちゃんが 面 倒 を みて下さったの で、まだ不幸中の幸いとでもいえるのですが、次の方 の記録は小学五年の女の子が休学して、生後半年の赤 ちゃんと病気のお母さんの世話をしたというのです。

≪休にちょっとでもさわると痛がり、排便の後始末 も満足にはさせない。

そのうちに、便は金部、おなかのあたりの皮膚を破って出てくるようになり、そこにガーゼをあてたり、おむつも、沢山使ったりした。それらの布はクレーゾル石けん液で消毒して、何回でも使えるようにした。 おまけにトコズレがひどくなって来て、それはアルコール綿でふいた。

食べものも、長い間、牛乳とジュースだけ。

家庭は72才の父親と、62才の母親。父親は螢光灯配線の内職をしており、母親は日雇に出ている。

夫も日雇。

更に夫の妹とその夫。

この義妹は15才の時から関節炎をわずらい,手足の 関節の自由がきかず,部屋の中を松葉杖をついてやっ と歩いている。そして、きれいな仕事はできないのだが、内職に編み物や洋裁をあずかっている。

彼女の夫は職人で、裘具師の店で働いているが大し た収入にはならないとのこと。

赤ちゃんのミルクもつくらなければならないので、 おばあさんが日雇いの仕事を休もうかとも考えたが、 仕事を休めばそれだけ生活が苦しくなるから、どうし ても休めない。

手術をした時も、つきそいさんを頼むなど、とうてい、かなわないことであり、小学五年の長女がとうとう休学したのだといっていた≫

つとめを休んでも

しかし、家政婦を頼めば1日350円、2カ月でザット2万円余り。時には食事付きになることもあるらしい。サラリーを停止されても、それでも自分の娘に世話になりたかったのでしょう。

助からない病気の末期の世話はほんとうに大変らしく、経済的に恵まれている方の場合には、おばあちゃんがいても、なおかつ、二人のつきそいさんを頼んで昼夜交代でみてもらった、という方もありました。

ともしびを

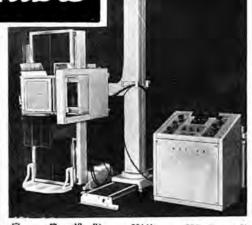
自分の肉親がガンで倒れたという人は,医学的には 素人であっても,現代の医療の弱点をズバリと衝いて いることがしばしばです。

早期発見,早期治療ということが 叫ばれていますが,そこには必ず何らかの隘路があり,その隘路が何であるかを,その人々は示してくれるのです。

赤ちゃんが生れた時、お医者さんは〝ガンがあるらしい〟といったが検査は何もしてくれなかった。そして1年後に突然、出血したという人の家族は、ガンの疑いがあったら直ちに検査をしてほしい、また権威ある施設への紹介ルートのようなものを定めてほしいと望んでおり、また、体が弱っていて、放射線の照射にとても通院できないといっても、空きベッドがなくて入院できず、病院の近くに家を借りて通ったという人々一。

そういう一人一人の話をきいているうちに、その話の中には、病気そのものの苦しみの他に、たどって行けばやがて解決の糸口がつかめそうな様々な社会的な要因が背景にあって錯乱していることを感じました。

Toshiba



定格 使用X線管 使用整流管 電

扱 彰 60 kVp 500 mA 1 秒 透 視 95 kVp 4 mA 連続 DRX - 70型(油浸・回転陽極・二 <u>重</u>無点) 取相交流 200 V 50 60∞

TOSHIBA TOSHIBA

 S K 式 心
 電
 計

 8 系統 脳
 波
 計

 血液等保存用恒温槽
 数
 財

 家庭電気器具各種

放射性同位元素照射装置 放射線測定器各種 放射線防護用具各種 放射性物質遠隔操作装置 放射線関係各種機器 体 温 計

東芝放射線株式会社 大阪支店

大阪市北区伊勢町六番地 電話 ⑩ 3778~9 • 7804 番

京都出張所 京都市中京区博門通鮮桑師! **・東之商事京都営業所内) 電話(2)1018・1527番 神戸出張所 神戸市生田区北長鉄 通5ッ)(東芝商事神戸営業所内) 電話(4)4771-3 8335番